

「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。道端のものとは、御言葉を聞くが、後から悪魔が来て、御言葉を心から奪い去るので、信じて救われることのない人たちである。岩の上に落ちたものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと落伍してしまう人たちである。茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に塞がれて、実を結ばない人たちである。良い地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」（ルカ8：11～15）

方々の町や村から大勢の群衆が御もとに集まって来たので、主イエスは「譬え」を用いて話された。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ちた。種は人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。他の種は岩の上に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。他の種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、種を塞いでしまった。また、他の種は良い土地に落ち、芽が出て、百倍の実を結んだ。

日本では、畝を作り、腰をかがめて、畝の中に丁寧に種を蒔き、上から土をかけるので、他の所に種が落ちるということはない。イスラエルでは、種蒔きは立って、広い畑に種をまき散らすように蒔く。種は色々な所に落ちることがある。主イエスは、種蒔きの話を「譬え」として用いて話し、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

弟子たちは、このたとえはどんな意味なのかと尋ねた。主イエスは彼らに、「あなたがたには神の国の秘儀を知ることが許されているが、他の人にはたとえを用いて話すのだ。それは『彼らは見ても見えず、聞いても悟らない』ためである」と言われた。弟子たちには神の国の秘儀を知ることが許されていると言われるが、弟子たちは秘儀を知ることができなかったのではないか。福音書の弟子たちは主イエスを理解できず、見当違いな野心を持っていたというのが事実である。他の人々には、「彼らは見ても見えず、聞いても悟らない」から譬えで語るのだと言われている。この言葉は、イザヤ書6章で、イザヤが預言者として召されて時、神の御言葉は民に受け入れられないと、示された言葉である。民の不信仰が預言者イザヤの生涯を苦難に満ちたものにしたのである。弟子たちも他の人たちも、主イエスの言葉を受け止めることができなかった。主イエスはそれを知って、見えない神や信仰について、「譬え」で語り、教えようとされたのであろう。

種蒔きの譬えの意味を分かりやすく説明している。種は神の言葉である。道端に落ちた御言葉の種は、踏みつけられ鳥に食べられる、即ち、悪魔が来て奪い取られるので、信仰は生まれぬ。岩の上に落ちた御言葉の種は、喜んで信じて受け入れるが、岩の上なので水気がなく、根を伸ばすことができず、試練に遭うと易々と放棄してしまう。茨の中に落ちた御言葉の種は、発芽しても、途中で人生の思い煩いや富や快樂という茨に塞がれて、実を結ばせるまで成長できない。良い地に落ちた御言葉の種は、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して育て、百倍の実を結ぶ。主イエスは譬えを語られた後、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で力説されたと書かれている。御言葉をどんな土壌で受け止めているかを問われたのである。私たちの土壌は道端、岩の上、茨の中であって、良い土地であるとは思えない。しかし、御言葉の種には命が宿り、その命によって、実を実らせてくださることを信じる事が許されている。それが福音である。